

# ALSの患者の夢手助け

仙台市に住む筋萎縮（いしゅく）性側索硬化症（ALS）の女性患者の自立の願いを助けようと、宮城大の学生有志が介護支援のサークルを結成。一年余りにわたって夜間、女性宅で泊まりがけの活動を続けている。重度訪問介護ヘルパーの資格を取るメンバーも増え、女性との「親子のようなきずな」を日々育てながら、将来への生きた学びを重ねる。

泉区南光台の千葉淑子さん（63）の家は毎夜、若者の声があふれる。ALSのため人工呼吸器を付けてベッドで過ごす千葉さん。昼は民間のヘルパーやボランティア、夜は学生サークルの



## 仙台 宮城大生有志が自立支援サークル

訪問介護を受ける。その名も「スマイルきのこ隊」（三十五人、顧問・高橋和子宮城大看護学部准教授）。四年前に発病。以前は次女美奈さん（33）が同居、働きながら夜の介護をしていたが、千葉さんは「患者も家族も自立して暮らせた」と願い、東北でもまだ少ない「二十四時間他者介護」の実践を思い立った。一昨年三月に、不自由な指でのパソコン操作で投稿を書き、本紙声の交差点」を通して支援者を募った。その訴えが、宮城大で看護学を志す学生たちの胸にも届いた。

その秋、「自分たちにも何かできないか」と当時の三年生ら有志が千葉さんを訪ねて相談し、サークルが発足した。「責任ある有償の活動をしよう」と東京で研修を受け、重度訪問介護従事者の資格を取ったメンバーも十人おり、仲間を引っ張る。夜七時半から翌朝まで二人一組で、呼吸器の

## 「何かできないか」夜間、泊まりがけでサポート



## 「24時間他者介護」を実現

点検や体位調整、家事や食事作りなどをする。

「大学の実習を経験する前に、実際の患者の方と出会い、どう接したらいいのかわかりませんでした。でも、分らないことは千葉さんに本人に聞けばいい」と

知り、何でも相談し、助言してもらえぬ仲になりました。三代目代表で二年の高松由和（ゆわ）さん（30）は、さんの往診医から介護研修う話す。声を出せない千葉さん、資格取得にも挑戦している。そこから、「在宅看護の道に関心を持つ先輩がほとんど」（高松さん）という。最近では宮城学院女子大にも仲間が広がった。ひたむきな若者の姿に千葉さんも「わたしの毎日の生活になくってはならない

メンバーは毎日のいろんな失敗、学んだ経験を活かしてレポートにするし、大学にリポートにするし、

メンバ

ベッドの千葉さんと、文字盤を通して語り合う「スマイルきのこ隊」メンバー＝仙台市泉区

「家族」です。どんどん成長して、将来が楽しみ」と文字盤を通して語った。若さと刺激をもらうそう

日本ALS協会宮城県支部も期待する。同じ患者の和川次男支部長（55）仙台市泉区IIの妻はつみさん（53）は「地域に介護力がないうと、患者も家族も生きていけない。看護を学ぶ若い人が支えてくれるのはうれしく、当事者の声から始まる医療のために一番大事なことです。その輪が広がるよう、支部としても応援していきたい」と言う。

（生活文化部・寺島英弥）